

令和8年3月2日

令和7年度（第76回）芸術選奨文部科学大臣賞及び同新人賞の決定

文化庁では、昭和25年から毎年度、芸術各分野において、国内若しくは国内外において優れた業績を挙げた方、又は新生面を開いた方に対して、芸術選奨文部科学大臣賞、同新人賞を贈っています。この度、本年度の受賞者が別紙のとおり決定いたしました。

1. 趣旨

芸術各分野において、毎年、国内若しくは国内外において優れた業績を挙げた者又はその業績によってそれぞれの部門に新生面を開いた者を選奨し、芸術選奨文部科学大臣賞及び同新人賞をおくることによって芸術活動の奨励と振興に資するものです。

2. 部門・贈賞

演劇、映画、音楽、舞踊、文学、美術A、美術B、メディア芸術、放送、大衆芸能、芸術振興、評論の12部門（大臣賞・新人賞ともに各部門原則として2名以内）にて実施。受賞者には賞状と、大臣賞には120万円、新人賞には80万円の賞金が贈られます。

3. 贈呈式・祝賀会

3月17日（火）都内ホテルにおいて行います。

4. 取材申込について

取材を御希望の報道関係者は、3月11日（水）正午までに別紙取材申込書に必要事項を記載の上、電子メールにてお送りください。

※贈呈式の詳細な時間、場所については事前登録の御連絡を頂いた際にお知らせします。

（セキュリティの都合上、贈呈式の詳細な時間、場所については、式終了後まで公表しないようにお願いします。）

＜担当＞文化庁参事官（芸術文化担当）付
参事官補佐：吉野 千津（内線2084）
舞台芸術係：片岡 さなえ（内線4777）
電話：03-5253-4111（代表）
03-6734-2081（直通）

令和7年度(第76回)芸術選奨受賞者一覧

【文部科学大臣賞:23名 文部科学大臣新人賞:22名と1組】

部門	賞名	受賞者	職業	授賞対象
演劇	大臣賞	サイトウ マサフミ 齋藤 雅文	劇作家	コビキチョウ 「木挽町のあだ討ち」ほかの成果
		ミカタ シズカ 味方 玄	能楽師	ミワ ハクシキカミカグラ 「三輪 白式神神楽」ほかの成果
	新人賞	オノエ ウコン 尾上 右近	歌舞伎俳優	シュンキョウカガミシン 「春興鏡獅子」ほかの成果
		ノゾミ フウト 望海 風斗	俳優	「マスタークラス」「エリザベート」の成果
映画	大臣賞	ヨシダ ダイハチ 吉田 大八	映画監督	「敵」の成果
		リ サンイル 李 相日	映画監督	「国宝」の成果
	新人賞	イシカワ ケイ 石川 慶	映画監督	「遠い山なみの光」の成果
		ヒロセ スズ 広瀬 すず	俳優	「ゆきてかへらぬ」「遠い山なみの光」「宝島」ほかの成果
音楽	大臣賞	エンドウ チアキ 遠藤 千晶	地歌箏曲演奏家	「遠藤千晶 箏リサイタル」の成果
		ヤマダ カズキ 山田 和樹	指揮者	「メンデルスゾーン——光のほうに」ほかの成果
	新人賞	クアルテット・インテグラ ミサワ キョウカ (三澤 響果)	弦楽四重奏団	「クアルテット・インテグラ II」ほかの成果
		キクノ リンタロウ (菊野 凜太郎)		
		ヤマモト イツキ (山本 一輝)		
	(パク・イエウン)			
	ナカイ トモヤ 中井 智弥	地歌箏曲演奏家・作曲家	「中井智弥 箏・二十五絃箏リサイタル2025」ほかの成果	
舞踊	大臣賞	ミヤガワ アラタ 宮川 新大	バレエダンサー	「眠れる森の美女」「ザ・カブキ」ほかの成果
		モリヤマ カイジ 森山 開次	舞踊家	「TRAIN TRAIN TRAIN」の成果
	新人賞	イワイ ユカ 岩井 優花	バレエダンサー	「白鳥の湖」「ドン・キホーテ」ほかの成果
		ハナヤギ ジュスケ 花柳 壽輔	日本舞踊家・振付家	イバラキ ヨメド 「茨木」「夢殿」ほかの成果
文学	大臣賞	いしい しんじ	小説家	「チェロ湖」の成果
		ホリエ トシユキ 堀江 敏幸	小説家	「二月のつぎに七月が」の成果
	新人賞	アサヒナ アキ 朝比奈 秋	小説家	「受け手のいない祈り」の成果
		オオツカ ガイ 大塚 凱	俳人	「或」の成果
美術A	大臣賞	アンドウ エイサク 安藤 榮作	彫刻家	「安藤榮作 一約束の船— The Promised Journey of Souls」展の成果
		オカザキ ケンジロウ 岡崎 乾二郎	造形作家・批評家	「岡崎乾二郎 而今而後 ジコンジゴ Time Unfolding Here」展の成果
	新人賞	アオキ チエ 青木 千絵	漆彫刻家	「闇へ研ぐ—青木千絵の造形と漆—」展の成果
		タマヤマ タクロウ 玉山 拓郎	アーティスト・美術家	「玉山拓郎:FLOOR」展ほかの成果
美術B	大臣賞	フカサワ ナオト 深澤 直人	プロダクトデザイナー	「Naoto Fukasawa Things in Themselves」展ほかの成果
	新人賞	エバラ evala	音楽家・サウンドアーティスト	「evala 現われる場 消滅する像」展ほかの成果
		ナガヤマ ユウコ 永山 祐子	建築家	大阪・関西万博における二つのパビリオンほかの成果
メディア芸術	大臣賞	ツルマキ カズヤ 鶴巻 和哉	監督	キドウセンシ ガンダム ジークアクス 「機動戦士Gundam GQuuuuuuX」ほかの成果
		マキムラ サトル 槇村 さとる	漫画家	「ダンシング・ゼネレーションsenior」の成果
	新人賞	タン ユキノブ 龍 幸伸	漫画家	「ダンダダン」の成果
		ハナエ ナツキ 花江 夏樹	声優	キメツ ヤイバムゲンジョウ アカザ カマドタンジロウ 『劇場版「鬼滅の刃」無限城編 第一章 猗窩座再来』竈門炭治郎役ほかの成果
放送	大臣賞	シバタ タケシ 柴田 岳志	演出家	『戦後80年ドラマ「八月の声を運ぶ男」』の成果
		ヨツモト ヨシタカ 四元 良隆	ディレクター・プロデューサー	「負けてタマルカ!!」「警察官の告白」の成果
	新人賞	アライ ジュンコ 新井 順子	プロデューサー	「海に眠るダイヤモンド」の成果
		バカリズム	脚本家・お笑い芸人	「ホットスポット」の成果
大衆芸能	大臣賞	オオスキ タエコ 大貫 妙子	音楽家	「ピーターと仲間たち 2025」ほかの成果
		シミズ ミチコ 清水 ミチコ	タレント	「清水ミチコ万博 ～ひとりPARADE～」の成果
	新人賞	オキナヤ ワスケ 翁家 和助	太神楽曲芸師	ジョウセキ 寄席の定席における太神楽曲芸の成果
		タマガワ ダイフク 玉川 太福	ロウキョクシ 浪曲師	シンジュクスエヒロテイ 新宿末廣亭の主任興行における成果
芸術振興	大臣賞	オダイ マミ 小田井 真美	テンジンヤマ さっぽろ天神山アートスタジオAIRディレクター	さっぽろ天神山アートスタジオでの活動ほかの成果
		フクイ ケンサク 福井 健策	弁護士	文化芸術における著作権を通じた基盤整備の推進の成果
	新人賞	マキハラ エリ 牧原 依里	映画作家・演出家	「黙るな 動け 呼吸しろ」ほかの成果
		ヤマシゲ テツオ 山重 徹夫	ビジュアル・アートディレクター	ナカノジョウ 「中之条ビエンナーレ2025」の成果
評論	大臣賞	オオデ アツシ 大出 敦	慶應義塾大学教授	ケイジジョウガク 「余白の形而上学 ポール・クローデルと日本思想」の成果
		マツクマ ヒロシ 松隈 洋	建築史家・神奈川大学教授	「未完の建築 前川國男論・戦後編」の成果
	新人賞	ザヘラ・モハッラミプール	国際日本文化研究センター特任助教	『「東洋」の変貌 近代日本の美術史像とペルシア』の成果

令和7年度(第76回)芸術選奨
文部科学大臣賞 贈賞理由

令和7年度(第76回)芸術選奨 贈賞理由一覧

【文部科学大臣賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
演劇	齋藤 雅文	劇団新派(しんぱ)の座付(ざつ)き作者から芸歴をスタートし、歌舞伎から現代劇まで幅広く手掛ける。同名小説が原作の「木挽町(こびきちょう)のあだ討ち」では脚本・演出として原作の味わいを損なわずに筋を通し、優れた群像劇に仕立てあげた。長く商業演劇に身を置く作者ならではの手腕が遺憾なく発揮された。小説「花と龍」の脚本では、原作の前半部分を換骨奪胎(かんこつだつたい)し、人物が生き生きと動く作品に作り上げた。大劇場演劇の貴重な書き手として実績を積み、今後の活躍も期待される。
演劇	味方 玄	平成8年に始めた自主公演「テアトル・ノウ」が記念の50回目を迎え、「三輪(みわ)」を、京都の片山家が創始した重い小書(こがき)「白式神神楽(はくしきかみかぐら)」で上演した。白一色をまとう三輪明神(みわみょうじん)の姿は、品格と清浄な気に満ちていた。初期の頃はホールや野外などで自由な演出に挑んだ自主公演であったが、近年は内面と自然な演技に重点を置く。他に「江口」など、本年の舞台はいずれも充実し、鍛えた技量と深い曲解釈とが高いレベルで交差した。講座、執筆などを通して能の魅力を広く発信してきた功績も大きい。
映画	吉田 大八	「敵」はコロナ禍の自粛期間中、吉田大八氏が筒井康隆氏の同名小説を自ら脚本化し、後に映画化した作品である。 外から来る何かに怯(おび)えるアイデンティティーのバルネラビリティ「vulnerability / 脆弱性(ぜいじやくせい)」は今や国境を超え、現代人に突き付けられた命題であるが、吉田氏はモノクロームの映像で、極めて鋭く、容赦なく掘り下げた。カタルシスを排し、不安や虚無を残す終わり方がこの問題を簡単に解決できないものとして私たちに突き付けてくる。長編デビュー作以来、人が自身の倫理観、道徳観で揺れる瞬間を、批評性を持って描いてきた到達点として高く評価する。
映画	李 相日	「国宝」は、歴代興行収入ランキングで22年ぶりに記録を塗り替え、邦画実写No.1作品となった。令和8年2月には200億を突破。現在もなお興行成績を更新中である。そうした数字の面だけではなく、女形としての才能を見いだされ歌舞伎の世界に入った主人公が、その家の御曹司と切磋琢磨(せつさたくま)の末、芸道に青春を捧げる吉田修一氏の原作を、氏が見事に映像化した。「フラガール」「悪人」と、着実にキャリアを積み重ねてきた氏の手腕は、大臣賞に相応(ふさわ)しい成果である。
音楽	遠藤 千晶	全曲独奏曲による本演奏会は、選曲と楽器を隔々まで鳴り響かせる優れた演奏によって、箏(こと)という楽器の無限の可能性を示した。各作品を丁寧に把握し、その上での端正な演奏によって、作曲された時代も性格も全く異なる作品の魅力を引き出すことに成功している。特に終曲の「手事(てごと)」では、和洋の各要素をバランスよく表現し、そこに込められた立体的な音の構造を際立たせたことで、作曲者の意図に迫るものであった。
音楽	山田 和樹	令和7年の山田和樹氏の活動は、その見識と主張、音楽的内容の充実において刮目(かつもく)すべきものであった。パーミングを中心として海外での活動を主軸にしながらも、国内においても氏しかなし得ないプログラミングとその演奏内容の充実を示した。大阪の4つのオーケストラと、盟友である東京混声合唱団と展開したメンデルスゾーン4回の演奏会の充実はその典型であり、日本フィルハーモニー交響楽団定期を含む11月末まで、その快進撃は続いた。
舞踊	宮川 新大	宮川新大氏は、所属する東京バレエ団で主要な役柄の多くを踊り、ゆるぎない技術とそこに立脚する気品ある物腰で注目されてきた。令和7年は古典名作「眠れる森の美女」の王子役でさらにその美点に磨きがかかり、またモーリス・ベジャール振付の「ザ・カブキ」では、削ぎ落とした感情の奥に静かな覚悟を宿した新世代のヒーローを造形。「ベジャールの「くるみ割り人形」」でも闊達(かつたつ)でコミカルな猫役で新境地を開き、幅広い作品に対応する柔軟な表現力を示した。

令和7年度(第76回)芸術選奨 贈賞理由一覧

【文部科学大臣賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
舞踊	森山 開次	創造性に富んだ作品で知られるダンサー・振付家。東京2020パラリンピック開会式に関わったスタッフを中心に、新たなメンバーも加わって制作された舞台「TRAIN TRAIN TRAIN」では演出・振付を担当。不思議なSLに乗った詩人の旅を、様々なパフォーマーの声や身体表現に、演奏、映像、テキストも駆使し、視覚だけ、聴覚だけでも楽しめる舞台に仕上げた。多様な表現を統合する演出手腕を発揮するとともに変幻自在なソロも披露。振付、踊りの両面で高いレベルにあることを印象付けた。
文学	いしい しんじ	釣りをし、料理をし、音楽を聴き、土地のことばで語り合う。愛用の楽器を奏で、歴史に翻弄されながら生のバトンを次世代に手渡す。いしいしんじ氏は大長篇(だいちょうへん)「チェロ湖」で、デジタル効率化に覆われる前の人間の営みを、五感で受けとり創りだすものへと再生させた。物語性では「古事記(こじき)」に、自然描写では「新古今和歌集(しんこきんわかしゅう)」にまでさかのぼる日本語による芸術表現の根を継いで、あらたな葉を繁らせ、見たことのない花を咲かせることに成功した。
文学	堀江 敏幸	堀江敏幸氏の「二月のつぎに七月が」は大衆食堂を舞台にした長編小説で、食堂関係者や常連客の交流をユーモアや哀感をまじえて繊細かつやわらかな筆致で描き出す。風味や調理法に限らず、嗜好(しこう)、食べ方の癖、消化の悩みなど「食」の話題をふんだんに盛り込む一方、氏ならではの話法の効果もあって、人々の声や思いが網の目のように連鎖し、言葉の脈(にぎ)わいが生み出される。心の傷や悔恨、不安、希望など生の有り様を多面的に慈愛とともにまとめあげる作家の卓越した技量が高く評価された。
美術A	安藤 榮作	安藤榮作氏は、東日本大震災と福島第一原発事故を経て制作拠点を奈良に移し、生と死を根源的テーマとする木彫(もくちょう)表現を展開させてきた。地元の木材を用い、斧(おの)による独特な技法で彫刻は生み出される。令和7年初秋、奈良県立美術館で開催された個展「約束の船」では、彫刻と平面を融合した大規模なインスタレーションを発表。深い精神性を湛(た)えた作品群が美術館全体を通して、現代を生きる我々に魂の在り処(ありか)を鋭く問い掛けた。その成果は、日本の現代彫刻に新たな可能性をもたらすものとして高く評価された。
美術A	岡崎 乾二郎	造形芸術と批評を通じて世界の認識を洞察してきた岡崎乾二郎氏。令和3年に脳梗塞を患い、造形作家としての「転回」を迎えた。東京都現代美術館での「岡崎乾二郎 而今而後 ジコンジゴ Time Unfolding Here」展では、転回以前の代表作を網羅しつつ、転回後の新作群を発表した。新作では、身体性を強く反映する粘土の仕事が印象深く、それらを3Dスキャナーで拡大した彫刻群は、巨大さと解像度の高い細部が両立した稀有(けう)な存在感に溢(あふ)れていた。新境地での一つの達成を讃(た)えつつ、更なる高みにも期待したい。
美術B	深澤 直人	深澤直人氏は、人間の行動に対する観察を丹念に行いながら、文化的脈絡や感覚的要素をも内包する環境をすくいと、とらえにくい要素も統合する独自のデザイン活動を展開している。デザインの本質的意義を探りながら地歩を築いてきた活動は国際的にも注目を集め、令和7年度には、主要作品を通してその創造哲学を俯瞰(ふかん)できる展覧会が開催された。哲学者カントの概念をタイトルに掲げた同展では深い思索に裏打ちされた氏の姿勢が浮かび上がり、現代デザインに対する重要な示唆を改めて提示する機会ともなった。以上の成果と、継続されている真摯な活動の功績を併せ、高く評価する。
メディア芸術	鶴巻 和哉	広い世代にファンを持つ「機動戦士ガンダム」の世界に、鶴巻和哉氏は「架空戦記」という切り口を持ち込み新風を吹き込んだ。原典からの「本歌取り(ほんかどり)」の妙と氏らしい世間に馴染(なじ)めない若者のドラマの二層構造。そこに華のある映像が融合した本作は、氏の新たな代表作である。劇場で先行上映されたTVシリーズ序盤は興行収入36億円超を記録。TV放送は、深夜0時過ぎの放送枠にもかかわらず、毎週SNS上で大きな反響を呼んだ。2020年代を代表する作品を送り出した業績を讃(た)えたい。

令和7年度(第76回)芸術選奨 贈賞理由一覧

【文部科学大臣賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
メディア芸術	槇村 さとる	画業 52 周年。今なお少女漫画の第一線で活躍する槇村氏。流行や価値観がめまぐるしく変わる中、時代に沿った等身大の女性を描き続けてきた。氏の描くヒロインたちは強く楽しくおしゃれに人生を開拓する。彼女らの姿は日本の女性たちの背中を押し、意識を押し上げてきた。現在「ココハナ」にて連載中の「ダンシング・ゼネレーション senior」では更年期と社交ダンスをテーマに人生の黄昏(たそがれ)における豊かな生き方について描き、たくさんの読者の人生を豊かにしている。
放送	柴田 岳志	「八月の声を運ぶ男」は、千人以上の被爆者の声を録音した放送記者を主人公に、一人の被爆者の向こうに無数の被爆者の存在を浮かび上がらせる秀逸な作品。ほぼ会話だけで構成される難易度の高い物語が一瞬も目を離せない仕上がりになったのは、柴田岳志氏の熟練かつ卓抜した演出手腕によるものである。これまで数々の秀作を送り出してきた実績も踏まえ、新しい技術・手法を貪欲に吸収しながら、繊細かつ骨太なドラマを世に出し続ける演出家としての姿勢を高く評価する。
放送	四元 良隆	息長く、へこたれず現実と向き合う意志が四元良隆氏の作品から迫ってくる。ディレクターとして20年にわたり難病の少年とその家族を見つめた「負けテタマルカ!!!」は、亡くなった我が子から、父と母が、生きることの希望を手渡されていく稀有(けう)な物語となった。また、プロデューサーを務めた「警察官の告白」は、鹿児島県警の不祥事隠蔽疑惑に丹念な取材で迫った。ある人物のインタビューに4か月をかけ、60本を越えるニュースなどを放送してドキュメンタリーにつなげた。その仕事は「故郷のために」テレビは何ができるのかという問いかけに貫かれている。
大衆芸能	大貫 妙子	シュガーベイブの「SONGS」がリリースされてから 50 年。ソロ・アルバム「サンシャワー」「ミニヨン」といった初期ソロ作品が、海外で再評価され、世界的なシティポップ・ブームの立役者の一人である大貫妙子氏は、デビュー50周年を迎えた。令和5年から「ピーターと仲間たち」という発表当時のオリジナル音源に忠実なサウンドや、シーケンサー、シンセサイザーを使用した楽曲を中心としたコンサートもスタートさせ、活発に音楽活動を展開。日本のポップス界を牽引(けんいん)しつづけている。
大衆芸能	清水 ミチコ	ラジオ番組へのネタ投稿をきっかけに才能を開花させ、軽快なトーク、得意なピアノを活(い)かした弾き語りものまね、さらには芸能人や文化人など人を選ばず特徴をデフォルメした顔まねと、テレビ・ラジオでのタレント活動とともに、芸域を拡(ひろ)げてきた。平成25年に始まった日本武道館ライブは、音楽的にもクオリティーの高い内容で、全国ツアーとともに「音楽とお笑いの融合」は大人のエンターテインメントとして唯一無二の芸を確立させた。
芸術振興	小田井 真美	さっぽろ天神山アートスタジオのAIRディレクターとして、長年にわたり日本におけるアーティスト・イン・レジデンスの発展と定着を牽引(けんいん)してきた第一人者である。創作現場に寄り添う運営を通じて、地域社会・行政・国際ネットワークを結ぶ基盤を築き、草の根の国際相互理解を促進してきた。さらにAIRネットワークジャパン等、同業者ネットワークの場での対話を通じ、各地の取組の要となる役割を果たしつつ、日本のAIRの信頼性を国際的に高めた功績は大きい。
芸術振興	福井 健策	福井健策氏は、著作権法を専門とする弁護士として、幅広い文化芸術分野の基盤整備に長年貢献してきた。とりわけ舞台芸術や映像作品の記録保存を可能にする権利処理の体系化を主導し、作品のアーカイブ化を大きく前進させた点は高く評価される。令和7年は特に、「エンタテインメント法実務 第2版」(編著)の出版や現場での知識普及活動を通じ、将来にわたる文化資源の継承と活用に不可欠な基礎を築いた。さらに政策形成や生成AIと著作権をめぐる議論にも尽力し、文化芸術支援の発展に寄与した。

令和7年度(第76回)芸術選奨 贈賞理由一覧

【文部科学大臣賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
評論	大出 敦	<p>ポール・クローデル。近代フランスの大文学者。外交官でもあった。1920年代には駐日大使を務めてもいる。はて、熱烈なカトリック信者のクローデルと、八百万(やおよろず)の神々の日本はどこまで切り結べたのか。難問だった。が、ついに魅力的突破口が示された。大出敦氏の細密な研究の上に大胆な議論が展開される。クローデルが惹(ひ)かれたのは平田篤胤(ひらたあつたね)の国学や能や水墨画。不可知の何かの存在を示唆したいものばかりだ。一方、キリスト教の神学とは語り得ぬ神の存在を示唆しようとする。余白か黒塗りのある形而上学だ。この交差からクローデルの文学は読み直されるであろう。日本発の偉大な成果である。</p>
評論	松隈 洋	<p>本書は20世紀の日本を代表する建築家・前川國男(まえかわくにょ)に関する非常に充実したモノグラフである。松隈洋氏は前川の戦前の仕事を論じた前著「建築の前夜 前川國男論」の問題意識を継承し、本書で前川の戦後の重要な仕事を余すことなく論じた。多くの作品を実見し、膨大な記録を参照して書かれた本書の根底には、晩年の前川に師事した氏ならではの深い理解と共感があり、また同時に前川國男という一人の人間が生きた時代の詳細な記録ともなっている。</p>

令和7年度(第76回)芸術選奨
文部科学大臣新人賞 贈賞理由

令和7年度(第76回)芸術選奨 贈賞理由一覧

【文部科学大臣新人賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
演劇	尾上 右近	役者絵から抜け出たような古風な容姿と、もう一つの顔、清元(きよもと)の唄方(うたかた)「栄寿太夫(えいじゅだゆう)」として鍛えた声調(せいちょう)、そして規矩(きく)正しい踊りの才幹(さいかん)が存分に花開いた令和7年だった。「春興鏡獅子(しゅんききょうかがみじし)の可憐(かれん)な小姓弥生(こしょうやよい)と荒ぶる獅子。どこか童話の主人公のような懐かしさのある「義経千本桜(よしつねせんぼんざくら)の狐忠信(きつねただのぶ)、そして自身の勉強会で演じた「盲目の弟」角蔵(かくぞう)は、いずれも曾祖父で六代目の尾上菊五郎(おのえきくごろう)が手掛けたもの。伝統を現代へという気概、新作への意欲など、次代の歌舞伎を牽引(けんいん)する一人だ。
演劇	望海 風斗	トップスターとして活躍した宝塚歌劇団を退団して5年。数々の話題作に主演し、舞台のトップ女優の地位を確立しつつある。「マスタークラス」では伝説的なオペラ歌手マリア・カラスを彷彿(ほうふつ)させる圧倒的な存在感で魅了した。「エリザベート」では16歳のお転婆少女から悲劇的な死を迎える晩年まで皇后の葛藤と孤独を優れた演技力と卓越した歌唱力で丁寧に演じ、初演から25年の超人気作のヒロイン像に確かな足跡を残した。
映画	石川 慶	石川慶氏の映画は、映像の力と観客を信じている。引いた風景の中での芝居、テレビに映るニュース、棚に置かれた花、食卓にこぼれる陽光。それら全てをもって大いなる生を語る。一瞬たりとも目を離せない。映画「遠い山なみの光」では、様々な光を生活空間に反射させ、小説家カズオ・イシグロの記憶に基づき、原爆復興期の1950年代の長崎と1980年代の英国を描いた。女性たちの記憶のリフレクションは、愛おしくも当たり前ではない日常の概念を際立たせた。
映画	広瀬 すず	広瀬すず氏は、13年ほどのキャリアを持ち、既に国民的な俳優と言える確かな地歩を築いている。主演の2作「ゆきてかへらぬ」「遠い山なみの光」を含む出演作では、奔放な女優から貞淑な妻までそれぞれに異なる難役を実に表現豊かに演じた。これまでに発揮してきた瑞々(みずみず)しさや自然体の魅力から一層飛躍し、その演技はより成熟と深みを増して、スクリーンを彩っている。氏にとって今後のさらなる活躍が期待される充実した年となった。
音楽	クアルテット・インテグラ	西洋音楽の基本形態ともいべき弦楽四重奏。これに継続的に取り組み目覚ましい成果を上げている若い世代が、近年我が国で多くみられる。中でもクアルテット・インテグラは、アンサンブルの緊密さ、解釈の清新さと大胆さにおいて一頭地を抜いている。そのことを、難度の高いバルトーク、ヤナーチェク、ベルクの作品を合わせた一夜で、まざまざと見せつけた。結成10年を迎えた令和7年は、ベートーヴェン・ツィクルスをも開始し、知的に練られた演奏を聴かせた。日本発の弦楽四重奏団として、今後、必ずや世界の第一線で活躍するであろう。
音楽	中井 智弥	中井智弥氏の第12回リサイタルでは、箏(こと)・三絃(さんげん)・二十五絃箏(にじゅうごげんそう)の演奏家および作曲家として、古典を意識しつつ新生面を切り開く多彩な活動の成果が示された。古典曲「秋風の曲」の演奏には確かな技量のなかに瑞々(みずみず)しさがあり、歌舞伎「刀剣乱舞(とうけんらんぶ) 東鑑雪魔縁(あずまかがみゆきのみだれ)」のテーマ曲をはじめ、次々に披露された自作曲の音楽性と演奏にも輝きがあった。ART歌舞伎の音楽や多様なジャンルの演奏家との共演など、多方面に躍進し、観客を魅了する彼の活動は、「時をこえて」というリサイタルの副題に象徴されるように、未来につながる新しい風として高く評価できる。
舞踊	岩井 優花	令和6年末にプリンシパルへ昇進し、同7年においては古典全幕やガラ公演において八面六臂(はちめんろっぴ)の活躍を見せた。「白鳥の湖」ではオデット/オディール、「ドン・キホーテ」では快活な町娘キトリと夢幻的な森の女王と、性格の異なる大役をいずれも見事に務め上げた。高度な技術と豊かな音楽性を融合させ、役に命を吹き込む表現力は、ドラマティックな熊川版バレエの表現者として大きな成果を挙げ、今後も更なる飛躍が期待される。

令和7年度(第76回)芸術選奨 贈賞理由一覧

【文部科学大臣新人賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
舞踊	花柳 壽輔	花柳流の当代家元として、三日間にわたる大規模な先代・先々代の追善舞踊会を主宰し、流派の大切な演目の数々に取り組み、旺盛な実践力を示した。とりわけ、難曲である初代花柳壽輔振付「茨木(いばらき)」に30代という若さで挑み、今の年齢に相応(ふさわ)しい調和でまとめあげたのが出色であった。また二代目花柳壽輔振付「夢殿(ゆめどの)」ではその精髓を確かに継承し、細部まで丁寧に表現していた。これらの成果は、次代の日本舞踊界を牽引(けんいん)する将来性を十分に示すものであり、今後一層の期待が寄せられる。
文学	朝比奈 秋	「受け手のいない祈り」は、緊急外来病棟を舞台に、過酷な医療現場の現実を克明に描いた作品である。瀕死(ひんし)の患者と対峙(たいじ)する緊迫した描写に加え、心身共に疲弊する医療従事者たちの救いのない絶望を冷徹な筆致で描き切る。「命を救う者が、自らの命を失う」という現代日本の矛盾を鋭く抉(えぐ)り出す、その圧倒的なリアリズムと筆力は、芸術選奨新人賞にふさわしい
文学	大塚 凱	大塚凱句集「或」は、現代に生きる若者の実感をたしかに捉えている。「着ぶくれて似てゐる午後をくりかへす」。厚着をして感覚が鈍っているせいもあって、驚きに満ちた新鮮な午後は永遠にこないかのように感じられている。静謐(せいひつ)ではあるが、切実でひりひりする「いま」が書きとめられている。「ビール呷(あお)るザハ案でない方の未来」。批判的視線もしたたか。連作を連ねた編集の句集ではあったが、一句一句それぞれの独立性は高い。
美術A	青木 千絵	青木千絵氏は、工芸と彫刻を横断する独自の人体表現を展開している。令和7年秋に岐阜現代美術館で開催された個展「闇へ研ぐ」では、研ぎによって生まれる漆黒の鏡面をもつ作品群が、人体の普遍的な美と漆表現に内在する膨大な時間性を鮮烈に立ち上げた。その造形は官能性を持ち、観(み)る者自身を作品へと投影させ、感覚を深く揺さぶる。効率や即時性が支配する現代において、これからの手仕事の意味と人間表現の新たな可能性を示した。
美術A	玉山 拓郎	玉山拓郎氏は、既存の建物や身近なものに光や映像、音を組み合わせ、空間全体を異化するインスタレーションを手掛けてきた。豊田市美術館の「玉山拓郎：FLOOR」展は、内と外の境界やスケール感を揺さぶり、見知った空間を見知らぬ空間へと変容させた大規模な試みだった。展示室で巨大な謎の構造物と出会った観客は、やがてそれが建物全体に貫入(かんにゅう)していることに気付く。谷口吉生(たにぐちよしお)氏の名建築への意表を突くアプローチ、驚くべき着想を形にする精緻な思考と実行力は高く評価される。
美術B	evala	令和7年のevala氏は、緻密に制御された美術館空間とオープンな野外建築という対照的な場で、聴覚体験の可能性を大きく拡張した。ICCで開催された大規模個展「現われる場 消滅する像」では、広大な展示空間を「空間的作曲」によって変容させる新作インスタレーションを多数発表し、知覚の境界が融解する場をつくり出した。さらに「養老天命反転中(ようろうてんめいはんてんちゅう)！ Living Body Museum in Yoro」では、音、身体、美術が有機的に絡み合ったパフォーマンスで、場所の記憶と身体感覚を揺さぶる新たな風景を出現させた。
美術B	永山 祐子	令和7年、永山祐子氏は、大阪・関西万博のウーマンズ パビリオンとパナソニックグループパビリオンを手掛け、初の単著と作品集を刊行した。注目すべきは、ウーマンズ パビリオンでは、様々な規制をクリアし、氏がデザイナー・アーキテクトを務めたドバイ万博日本館の組子(くみこ)ファサードのリユースを実現したこと。連続した万博で同じ部材が転用されるのは史上初だろう。しかも二つのパビリオンのファサードは、2027年国際園芸博覧会の異なる出展施設で再利用することも、万博の会期中に決定した。先駆的な循環型プロセスの試みとして高く評価できる。

令和7年度(第76回)芸術選奨 贈賞理由一覧

【文部科学大臣新人賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
メディア芸術	龍 幸伸	平成22年にデビューし数々の作品を描いてきた龍幸伸氏が、掲載誌を変え、令和3年に満を持して挑んだ作品が「ダンダダン」である。本作に至るまでの歩みは、マンガ業界においては「遅咲き」とも言えるものであった。しかし、その時間のもたらした成熟があったからこそ、オカルトとSF、青春と恋愛、恐怖と笑いを自在に融合させる破格の表現を可能にしたのであろう。物語の随所には「まさか」と思わせる展開が仕掛けられ、卓越した作画力と相まって、作品全体から圧倒的なエネルギーが迸(ほとばし)っている。氏の稀(まれ)なる才能が「ダンダダン」で解き放たれたことはマンガ界にとって僥倖(ぎょうこう)であり、今後の更なる進化が期待される。
メディア芸術	花江 夏樹	世界的に盛り上がりを見せた『劇場版「鬼滅の刃」無限城編 第一章 猗窩座再来』で主役・竈門炭治郎を熱演して作品を牽引(けんいん)した。炭治郎の頑張りに励まされた観客も多いだろう。さらにTVでも「ダンダダン」のメインキャラクターであるオカルンを筆頭に多数の作品に出演し、「劇場版 チェンソーマン レゼ篇」『ホウセンカ』では印象的な役柄で、主人公とは違う魅力も見せた。この充実したパフォーマンスと、その魅力が更に深まっていくことを期待して新人賞を贈る。
放送	新井 順子	新井順子氏がプロデューサーを務める「アンナチュラル」や「MIU404」は多くの支持を集めてきた。「海に眠るダイヤモンド」はその集大成である。昭和30年代の長崎県端島(はしま)と現代の東京。二つの時代を行き来しながら、それぞれの「場」に生きる人々の現実や心情を描いていく。戦争、原爆被爆、産業問題といった風化させてはならない事実を取り込み、“ネオ社会派”ともいえる秀作となった。
放送	バカリズム	バカリズム氏はお笑い芸人として活躍する傍ら、近年脚本家として頭角を現し、テレビドラマ「架空OL日記」、「ブラッシュアップライフ」に続いて、「ホットスポット」で高い評価を得た。氏の脚本の特徴は、突飛な設定を用いながらも、リアルな日常会話を通して女性たちの友情や連帯を生き生きと描く点にある。独特な笑いのエッセンスが散りばめられた脚本は幅広い視聴者を惹(ひ)き付け、テレビドラマの活性化にも貢献しており、更なる活躍が期待される。
大衆芸能	翁家 和助	どのような出番で高座に上がっても、きちんと存在感を示し、後に上がる落語家の邪魔をしない。わきまえた芸が芸人仲間から高い評価を得ている。国立劇場の太神楽研修生第1期生で、研修終了後は落語協会に所属し、寄席には欠かせない太神楽芸人として実績を積み上げた。芸に対する取組は先鋭的で、扇子をアクロバティックに組み込んだ芸を3年がかりで開発するなど、新時代の太神楽芸を常に模索し続けている。今後の飛躍も期待できる逸材である。
大衆芸能	玉川 太福	令和7年1月下席(しもせき)、新宿末廣亭で、玉川太福氏は浪曲師としては約60年ぶりにトリを務めた。連日大入り満員、正に祝祭の日々だった。ネタは多岐にわたり「陸奥間違(むつまちが)い」や一門のお家芸・天保水滸伝(てんぼうすいこでん)「笹川(ささがわ)の花会(はながい)」といった古典、自作の「地べたの二人」、同氏が生涯の仕事として取り組んでいる映画寅(とら)さんシリーズの「寅次郎夕焼け小焼け」などで観客をわしづかみにした。演芸史に刻まれる興行として高く評価したい。
芸術振興	牧原 依里	構成・演出を担当した舞台作品「黙るな 動け 呼吸しろ」では、ろう者と聴者の感覚や言語の違い(手話言語と音声言語)を背景とする社会課題が可視化され、社会と芸術を架橋するとともに、違いを超えて他者とつながる新たな芸術回路を創出し、芸術文化の公共性の在り方を更新した。また「手話のまち 東京国際ろう芸術祭2025」(総合ディレクター)では、これまでに構築した国内外のネットワークを活(い)かし、ろう者の文化や芸術表現を社会に開く活動を幅広く展開した。

令和7年度(第76回)芸術選奨 贈賞理由一覧

【文部科学大臣新人賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
芸術振興	山重 徹夫	<p>中之条ビエンナーレは、群馬県中之条町で隔年開催される芸術祭で、令和7年に10回目を迎えた。立ち上げから20年を経て、あらゆる年齢層の地域住民に愛される芸術祭へと成長し、本展を契機に同地へ拠点を移す作家も現れるなど、地方都市におけるクリエイティブなコミュニティの形成に寄与した。総合ディレクターとして設立当初から本事業を牽引(けんいん)する山重徹夫氏は、作家自身の主体的な参画を促すような企画運営を通じて、地域社会と作家たちをつなぐ芸術祭の在り方を切り拓(ひら)いた。</p>
評論	ザヘラ・モハツラミプール	<p>日本語の「東洋」はオリエントの単純な訳語ではない。好奇心旺盛な近代日本の知性が「東洋」を拡大させていった。中国からインドへ。もっと先へ。日本と強くつながればそこは「東洋」。1929年、帝室(ていしつ)博物館(現東京国立博物館)はその範囲を「ペルシャの辺」にまで広げる。カギを握ったのは法隆寺の蔵(ぞう)する「四騎獅子狩文錦(しきししかりもんきん)」。探偵役は建築家の伊東忠太(いとうちゅうた)や歴史学者の黒板勝美(くろいたかつみ)。彼らが、遠すぎると思われていたイランを、ぐいぐい日本に寄せていく。その展開は上質な推理小説を思わせる。ザヘラ・モハツラミプール氏は「東洋」概念拡張史としての近代日本文化芸術史を今後もっと掘り下げてくれるだろう。</p>

令和7年度(第76回)芸術選奨
選考経過

令和7年度(第76回)芸術選奨選考経過一覧

部門	選考経過
演劇	<p>演劇部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として15名、文部科学大臣新人賞候補者として16名の推薦があった。伝統演劇から現代演劇まで、いずれも今日の演劇界を牽引(けんいん)する俳優・劇作家・演出家たちである。</p> <p>第一次選考審査会では、受賞者は各部門2名、同じジャンルからの受賞も拒まないことを確認した上で選考審査員各々が推薦理由を述べ、さらに推薦委員から寄せられた候補者を交えて忌憚(きたん)のない意見交換を行った。その結果、文部科学大臣賞候補5名、文部科学大臣新人賞候補8名まで絞り込んだ。なお、両部門にまたがる候補者の処遇については、第二次選考審査会で改めて検討することとした。</p> <p>第二次選考審査会では、まず検討課題について候補者の実績・将来性など細かく協議を重ねた後、文部科学大臣賞受賞者の選考に移った。結果、原作を生かしつつ、新味を加えて成果に結び付けたことが高く評価された齋藤雅文氏と、能の普及に心を砕いて、様々な場で観客の掘り起こしをしてきた努力が舞台に結実した、と評価された味方玄氏の受賞となった。</p> <p>また、文部科学大臣新人賞には世紀の歌姫マリア・カラスの孤高を浮かび上がらせた望海風斗氏と、伝統演劇の世界にあって、令和という新時代の幕開けを感じさせた尾上右近氏への贈賞を決めた。</p>
映画	<p>映画部門では、選考審査員と推薦委員から文部科学大臣賞11名、文部科学大臣新人賞11名の推薦があった。第一次選考審査会で文部科学大臣賞候補を6名に、文部科学大臣新人賞候補を4名に絞り込み、第二次選考審査会に臨んだ。令和7年度の審査の特徴は、歌舞伎界を活写(かつしゃ)した「国宝」から、李相日監督をはじめ多くの候補者が推薦されたことである。同作は実写邦画の興行記録を更新し、社会現象となるとともに、芸術的にも高く評価された。「本年は「国宝」に逆らえない」として複数人の授賞を望む声も根強くあったが、「「国宝」以外にも優れた作品があったことを芸術選奨として残しておくべきだ」との意見がわずかに上回ったこと、「李監督への授賞はスタッフや俳優の功績を代表してのものである」との考えから、文部科学大臣賞には、「国宝」と並ぶ評価を得た「敵」の監督である吉田大八氏を、李相日氏とともに選出した。文部科学大臣新人賞は、卓越した構成力と演出力を「遠い山なみの光」で示した映画監督の石川慶氏と、多くの意欲作に出演して演技の幅を一気に広げた俳優の広瀬すず氏への贈賞であり、異論は少なく多数意見を占めた。</p>
音楽	<p>音楽部門では選考審査員及び推薦委員から文部科学大臣賞の候補に11件、文部科学大臣新人賞の候補に14件の推薦があった。第一次選考審査会では書面を参考に意見交換し、文部科学大臣賞5件、文部科学大臣新人賞6件に絞り込んだ。第二次選考審査会では選考審査員が述べた所見に基づき、文部科学大臣賞2件、文部科学大臣新人賞2件を選出した。令和7年度の活動の評価に視点を置いた結果、国内外のオーケストラで目覚ましい活動をみせた指揮者の山田和樹氏と、古典曲から委嘱作までをまとめた独奏リサイタルで力を発揮した地歌箏曲(じうたそうきょく)演奏家の遠藤千晶氏が文部科学大臣賞となった。文部科学大臣新人賞は気鋭のカルテット・インテグラと地歌箏曲演奏家で作曲家の中井智弥氏が選ばれた。弦楽四重奏団については受賞対象が「原則として個人」という規定との関係が議論されたが、受賞者は恒常的な活動を行い、一人の人格に等しい一体性を持つことが特に評価された。後者は新人賞としては業績が多いものの、二十五絃箏(にじゅうごげんそう)を含むリサイタルと自曲の新作歌舞伎において新規性があると評価された。</p>
舞踊	<p>舞踊部門では、文部科学大臣賞候補者として15名、文部科学大臣新人賞候補者として17名の推薦があった。第一次選考審査会において、慎重かつ公正に審議し、ジャンルも配慮した上で、文部科学大臣賞5名、文部科学大臣新人賞4名に絞り込んだ。</p> <p>第二次選考審査会では、過去の実績や将来性、舞踊界に与える影響などの視点を加え、さらに審議を進めた。その結果、文部科学大臣賞には、宮川新大氏と森山開次氏が満場一致で選ばれた。宮川氏は、令和6年度に続く同バレエ団からの選出について議論されたが、対照的な個性とキャリアが高く評価された。森山氏は、現代における価値観ある創作と今後の成長への期待から強く支持された。文部科学大臣新人賞には、共に推薦の多かった岩井優花氏と花柳壽輔氏が同じく満場一致で選出された。岩井氏は、選考期間において幅広い役による充実した舞台成果が高評価に、花柳氏は、流派の会であっても、大劇場で開催し、体力的・精神的な負担を乗り越えた点と将来性が大いに期待された。</p>

令和7年度(第76回)芸術選奨選考経過一覧

部門	選考経過
文学	<p>文学部門では選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者、文部科学大臣新人賞候補者としてそれぞれ12名の推薦があった。第一次選考審査会の結果、文部科学大臣賞、文部科学大臣新人賞とも5名に候補者が絞られ、第二次選考審査会で討議の結果、ほぼ全員の賛同を得て、次の受賞者が決まった。</p> <p>文部科学大臣賞には堀江敏幸氏の「二月のつぎに七月が」と、いしいしんじ氏の「チェロ湖」が選ばれた。前者は大衆食堂に集う人々の日常的な交流を描きつつ、そこに垣間見える心の揺れや奥行きを卓越した表現力で捉えたと評価された。後者はチェロの形をした湖を舞台に展開する一族の物語で、自然との共生が、音楽性あふれる散文と夢幻的なイメージで表現され、その自在なりアリティの懐の深さに評価が集まった。</p> <p>文部科学大臣新人賞には朝比奈秋氏の「受け手のいない祈り」と、大塚凱氏の「或」が選ばれた。前者は救急医療に携わる主人公が心身の限界に追い込まれながら、同僚や患者の生と死に向き合う様子を圧倒的な描写力でとらえたと評価された。後者はリズム、文法、題材から、イメージの動かし方、テーマの展開まで多方面で俳句の可能性を広げた画期的な作品と賞賛された。</p>
美術A	<p>美術A部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者9名、文部科学大臣新人賞候補者12名の推薦があった。第一次選考審査会では、全候補者の推薦書や資料を基に、審査員全員で慎重に協議し、文部科学大臣賞候補者4名、文部科学大臣新人賞候補者6名を第二次選考審査会へ進めた。</p> <p>第二次選考審査会では、絞り込まれた候補者の業績について再度協議した後、投票を実施。投票で同数となった場合は全審査員の意見を求め、再投票の結果、選考審査員の総意として文部科学大臣賞2名、文部科学大臣新人賞2名を決定した。</p> <p>文部科学大臣賞は、木彫(もくちょう)の安藤榮作氏と、多彩なメディアを駆使する岡崎乾二郎氏が受賞。いずれも長いキャリアの集大成となる美術館での充実した個展が評価された。文部科学大臣新人賞は、漆による特異な人物像を制作する青木千絵氏と、美術館の空間全体を作品化した玉山拓郎氏が受賞し、今後の展開が期待されると高く評価された。</p>
美術B	<p>美術B部門では、選考審査員及び推薦委員から文部科学大臣賞候補者10名、文部科学大臣新人賞候補者12名が推薦された。第一次選考審査会では候補者の作品や活動について、推薦理由及び資料を基に、意見交換を行った上で、投票を行い文部科学大臣賞は5名、文部科学大臣新人賞は6名に候補者を絞り込んだ。</p> <p>第二次選考審査会では、候補者の活動、推薦理由について改めて確認をした上で複数回の投票の結果、文部科学大臣賞に深澤直人氏、文部科学大臣新人賞にevala氏、永山祐子氏を選出した。</p> <p>深澤氏は「デザイン」を真摯に問う活動を続けてきた中で、これまでの仕事の集大成とも言える回顧展により、その業績が国際的にも高く評価された。evala氏は立体音響技術を用い、未知のサウンド体験を可能とした。永山氏は環境負荷の低減等を重視し、持続可能な社会に向けた建築の在り方を指し示した。</p>
メディア芸術	<p>メディア芸術部門では、選考審査員及び推薦委員から文部科学大臣賞候補14名、文部科学大臣新人賞候補は18名が推薦され、第一次選考審査会で文部科学大臣賞6名、文部科学大臣新人賞11名に絞られた。第二次選考審査会では、多くの委員が鶴巻和哉氏の「機動戦士 Gundam GQuuuuuuX」を挙げた。シリーズ新作にして初代の架空戦記である斬新なIPのリブランディングを評価し、文部科学大臣賞に選出した。また、「ダンシング・ゼネレーション senior」の榎村さとる氏に対して、50年を超え月間連載の執筆を続ける姿勢と、年代と共に世代のリアルな物語を描く作風を評価し、もう一名の文部科学大臣賞となった。文部科学大臣新人賞は、各分野から多彩な候補が出揃(でそろ)い、委員による議論が白熱したが、多角的な審議を経て、二名を文部科学大臣新人賞として選出した。一名は「ダンダダン」でグローバルに若い世代の注目を集めている龍幸伸氏。多様な要素をハイテンポでパワフルに、かつ繊細に描く作風に多くの評価が集まった。そしてもう一名は、『劇場版「鬼滅の刃」無限城編 第一章 猗窩座再来』竈門炭治郎役などに出演の花江夏樹氏。多くの作品で様々なキャラクターを演じた功績で、新たなジャンルを創造していると評価。声優としてメディア芸術部門初の受賞となった。</p>

令和7年度(第76回)芸術選奨選考経過一覧

部門	選考経過
放送	<p>放送部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補に15名、文部科学大臣新人賞候補に15名の推薦があった。第一次選考審査会では、候補者の業績について様々な視点から意見が交わされ、文部科学大臣賞候補5名、文部科学大臣新人賞候補7名に絞られた。</p> <p>第二次選考審査会では、両賞ともに絞り込まれた候補者の業績について改めて議論。文部科学大臣賞には、演出家として脚本や出演者の演技を統合して、一筋縄では語れない戦争の悲劇をドラマに仕立て上げた柴田岳志氏と、多くの取材対象者に粘り強く迫り続けた成果として、出色のドキュメンタリーを生み出したディレクター・プロデューサーの四元良隆氏が選出された。文部科学大臣新人賞には、日常会話の中に鋭い人間観察を織り交ぜる作風などが高く評価された脚本家のバカリズム氏、個人の物語でありながら歴史の闇の部分をも掘り起こすドラマを制作したプロデューサーの新井順子氏が選出された。両氏とも、これまで多くの優れた番組に参画しており、将来の更なる飛躍が期待されるとして、今回、文部科学大臣新人賞として顕彰することになった。</p>
大衆芸能	<p>大衆芸能部門では、選考審査員及び推薦委員から文部科学大臣賞候補として14名、文部科学大臣新人賞候補として15名が推薦された。第一次選考審査会では、文部科学大臣賞候補として5名、文部科学大臣新人賞候補として8名に絞り込んだ。第二次選考委員会で審議を重ねた結果、文部科学大臣賞は、シュガーベイブでのデビューから50年という節目の年に、コンサートで独自の音楽性を再認識させてくれた音楽家の大貫妙子氏、さらに年始の武道館公演及び全国ツアーでの卓越した模写芸を軸としたエンターテインメントを披露したタレントの清水ミチコ氏の2名を選出した。同じく文部科学大臣新人賞は、太神楽曲芸(だいかぐらぎょくげい)のエキスパートとして寄席の空気を華やかに彩る翁家助和氏、さらに浪曲師として60数年ぶりに新宿末廣亭1月下席(しもせき)の主任(トリ)を務めるなど名実ともに高い評価を得た玉川太福氏の2名を選出した。結果的に文部科学大臣賞の2名、文部科学大臣新人賞の2名、いずれも「大衆芸能」の領域の広さを示す贈賞となった。</p>
芸術振興	<p>芸術振興部門では、選考審査員、推薦委員、及び他部門から、文部科学大臣賞候補者として23名、文部科学大臣新人賞候補者として17名の推薦があった。第一次選考審査の結果、文部科学大臣賞、文部科学大臣新人賞ともに5名に候補者が絞られ、第二次選考審査の結果、文部科学大臣賞に、さっぽろ天神山(てんじんやま)アートスタジオのディレクターとして、日本のアーティスト・イン・レジデンスの発展に貢献した小田井真美氏、法律家として、文化芸術における著作権を通じた基盤整備を推進した福井健策氏の2名が選出された。文部科学大臣新人賞には、映画、演劇、社会実践等を通して「ろう文化」の芸術活動を展開した牧原依里氏、ビジュアル・アートディレクターとして「中之条ビエンナーレ2025」が高い評価を得た山重徹夫氏の2名が選出された。文化芸術分野での独創的で幅広い活動や社会貢献が評価の基準となる芸術振興部門において、クリエイター、プロデューサー、キュレーターといった現場の人材に限らず、様々な形で後方支援に携わる人材が評価されることが期待される。</p>
評論	<p>評論部門では、選考審査員及び推薦委員から文部科学大臣賞候補者として26名、文部科学大臣新人賞候補者として18名が推薦された。第一次選考審査会では、推薦書類の内容を吟味しつつ慎重に審議を行い、文部科学大臣賞は6名、文部科学大臣新人賞は3名の候補者に絞り込んだ。</p> <p>第二次選考審査会では、多様な芸術ジャンルに目配りしながら、各候補者の著作について真摯な議論を交わした結果、文部科学大臣賞に大出敦氏と松隈洋氏を選出した。大出氏の「余白の形而上学(けいじょうがく) ポール・クローデルと日本思想」は、駐日フランス大使であった詩人・劇作家が、能など日本の芸術を媒介に、キリスト教徒として日本思想と対峙する様を解明した重厚な評論である。松隈氏の「未完の建築 前川國男論・戦後編」は、ル・コルビュジエの薫陶を受け、日本のモダニズム建築を牽引(けんいん)した建築家の作品と思想を、時代の中に位置付けて詳述した集大成的な評伝である。文部科学大臣新人賞は、ザヘラ・モハッラミプール氏に決定した。「『東洋』の変貌 近代日本の美術史像とペルシア」は、サーサーン朝ペルシアの美術が近代日本において「東洋美術」と見なされる歴史的な過程を、徹底的な資料調査を通して跡付けた労作で、高い評価に値する。</p>

芸術選奨実施要項

令和 5 年 4 月 4 日
文 部 科 学 大 臣 決 定
一部改正令和 6 年 5 月 2 4 日

1 趣旨

芸術各分野において、毎年、国内若しくは国内外において優れた業績をあげた者又はその業績によってそれぞれの部門に新生面を開いた者を選奨し、これに芸術選奨文部科学大臣賞又は芸術選奨文部科学大臣新人賞をおくることによって我が国の芸術活動の奨励と振興に資する。

2 部門

- (1) 演劇（歌舞伎・能楽・文楽・新派・新劇・ミュージカル等の劇作家、演出家、演技者、舞台美術家等）
- (2) 映画（劇映画・記録映画等の演出家、脚本家、撮影者、演技者等）
- (3) 音楽（邦楽・洋楽・オペラ等の演奏家、指揮者、作曲家、演出家、舞台美術家等）
- (4) 舞踊（邦舞・洋舞等の舞踊家、演出振付家、舞台美術家等）
- (5) 文学（小説・短歌・俳句・詩・大衆文学・児童文学等の作家、翻訳家等）
- (6) 美術A（絵画（版画含む）・彫刻（インスタレーション含む）・工芸・書等の作家等）
- (7) 美術B（建築・デザイン・写真・映像・メディアアート・その他の新傾向の作家等）
- (8) メディア芸術（デジタル作品（デジタル技術を用いて作られたエンターテインメント作品等）・アニメーション・マンガの作家等）
- (9) 放送（ラジオ・テレビのドラマ・ドキュメンタリー等の作家、演出家、演技者等）
- (10) 大衆芸能（落語・講談・浪曲・漫才・大衆演劇・ショウ・ポピュラーミュージック等の作家、作曲家、演出家、演技者等）
- (11) 芸術振興（新しい領域や複数の部門・分野にわたり文化芸術活動を行っている者）
- (12) 評論（芸術活動に対して、活字等によって批評を行うことで芸術活動を支える芸術評論家等）

3 賞の対象

- (1) 賞は、文部科学大臣賞状及び賞金とする。
- (2) 芸術選奨文部科学大臣賞は、特に優れた業績をあげた芸術家等（原則として個人）を対象とするもので、各部門 2 名以内を原則とする。
- (3) 芸術選奨文部科学大臣新人賞は、新人の芸術家等（原則として個人）を対象とするもので、各部門 2 名以内を原則とする。

4 選考の時期

選考は、毎年、原則として 1 月中に行うものとし、選考の対象となる業績は、主として前々年の 1 2 月から前年の 1 1 月までの間にあげられたものとする。

5 選考方法

- (1) 文化庁長官は、実演家、専門家及び学識経験者の中から各部門の選考審査員及び推薦委員を委嘱する。ただし、評論部門には推薦委員を設けない。
- (2) 各部門の選考審査員及び推薦委員が、それぞれの部門にかかる候補者を推薦する。ただし、芸術振興部門及び評論部門については、他部門の選考審査員及び推薦委員からも推薦することができるものとする。また、美術 A 部門及び美術 B 部門の推薦委員は、美術 A・B 部門のいずれにも候補者を推薦できるものとする。
- (3) 各部門の選考審査員を構成員とした選考審査会を設置し、審査を行う。
- (4) 文部科学大臣は、選考審査会における審査結果を尊重して、受賞者を決定する。

6 実施細則

芸術選奨実施要項の実施に関して必要な事項は、文化庁次長が別に定める。

芸術選奨実施細則

平成11年 5月13日
文化庁次長決裁
一部改正平成13年 1月 6日
一部改正平成15年 4月 1日
一部改正平成16年 4月 1日
一部改正平成19年12月26日
一部改正平成24年 4月 1日
一部改正令和 5年 4月 4日

1 趣旨

この細則は、芸術選奨実施要項（令和5年4月4日文科科学大臣決定）6の規定に基づき、芸術選奨実施要項の実施に関して必要な事項を定める。

2 選考対象者

選考に当たっては、下記のこと留意する。

- (1) 過去に芸術選奨文部科学大臣賞又は同新人賞を受賞した者は、同一部門の同種の賞については対象としない。
- (2) 文化功労者、日本芸術院会員、重要無形文化財（各個認定）保持者、叙勲、紫綬褒章受章者、日本芸術院賞受賞者については対象としない。
- (3) 当該年の業績に加え、将来性、年齢、他の受賞歴等の過去の業績等も勘案するとともに、物故者は対象としない。
- (4) 受賞者の年齢は、授賞時原則として文部科学大臣賞は70歳未満、新人賞は50歳未満とする。
- (5) 受賞者は、芸術活動を通じて社会に貢献し、国民の模範となり得る者であることとする。

3 賞の対象にかかる補足事項

- (1) 実施要項2（11）芸術振興部門において定める「新しい領域や複数の部門・分野にわたり文化芸術活動を行っている者」とは、次の者をいう。
 - ①新たな芸術分野を創造し、又は普及させるなど著しい貢献のある者
 - ②複数の部門・分野にわたった文化芸術活動を行い、その活動が斯界に大きな影響を与えている者
 - ③他部門に該当しない文化芸術活動を行っている者で、その活動が国内若しくは国外において広く一般に認知され、一定の評価を得ている者
- (2) 実施要項3（3）に定める「新人の芸術家等」とは、次の者をいう。
 - ①活動の期間及び実績が比較的少ないこと。
 - ②今後活躍が大いに期待されること。

4 その他

- (1) 選考審査員及び推薦委員の任期は1年とする。ただし、再任を妨げない。
- (2) 選考審査員及び推薦委員は、次に掲げるものに該当すると自ら判断する場合又は選考審査会等において判断された場合は、推薦及び選考に参画しないものとする。
 - ①親族関係又はそれと同等の親密な個人的関係
 - ②選考の対象である活動を企画した者である場合
 - ③選考の対象である活動の指導を行う者若しくは出演者又は出品者である場合
 - ④密接な師弟関係
 - ⑤上記①から④に掲げるもののほか、利害関係を有すると考えられる関係
- (3) 選考過程については、非公開とする。又、選考審査員及び推薦委員は、選考に関して知り得た秘密を漏らしてはならない。選考審査員及び推薦委員でなくなった後においても、同様とする。

- (4) 文部科学大臣は、被表彰者としてふさわしくない非行行為、被表彰者に係る提出書類に不実又は虚偽の記載の事実が判明した時は、被表彰の決定を取り消すことができる。

令和7年度(第76回)芸術選奨委員一覧【選考審査員】

【演劇部門】			【美術B部門】		
いぬまる 犬丸	おさむ 治	演劇評論家	いがらし 五十嵐	たろう 太郎	建築史家、建築評論家、東北大学教授
こだま 小玉	しょうこ 祥子	演劇ジャーナリスト	かわかみ 川上	典季子	デザインジャーナリスト、21_21 DESIGN SIGHTアソシエイトディレクター
こだま 児玉	まこと 信	一般社団法人義太夫協会会長／藝能学会副会長	くぼた 久保田	あきひろ 晃弘	多摩美術大学教授
だて 伊達	なつめ	演劇ジャーナリスト	てはら 出原	ひとし 均	アーツ前橋館長
はた 畑	りつえ 律江	毎日新聞客員編集委員、大阪芸術大学短期大学部客員教授	にわ 丹羽	はるみ 晴美	東京都写真美術館事業企画課長、学芸員
はやし 林	なおゆき 尚之	演劇ジャーナリスト	はら 原	ひさこ 久子	大阪電気通信大学教授
ばんどう 坂東	あやこ 亜矢子	演劇ジャーナリスト	【メディア芸術部門】		
【映画部門】			おかもと 岡本	みづこ 美津子	東京藝術大学大学院映像研究科 教授
いしとび 石飛	のりき 徳樹	映画評論家	こにし 小西	としゆき 利行	Creative Director、Copywriter
おがわ 小川	ともこ 智子	脚本家、大阪芸術大学教授	たにぐち 谷口	あきひこ 暁彦	メディアアーティスト
きんばら 金原	ゆか 由佳	映画ジャーナリスト	ときた 時田	たかし 貴司	ゲームプロデューサー、東京藝術大学大学院特別教授
すわ 諏訪	のぶひろ 敦彦	映画監督、東京藝術大学大学院教授	ひがむら 東村	アキコ	漫画家
せきぐち 関口	ゆうこ 裕子	映画評論家、編集者	ふじつ 藤津	りょうた 亮太	アニメ評論家
のむら 野村	まさあき 正昭	映画評論家	みかわ 三河	かおり	京都精華大学副学長
わたなべ 渡邊	だいすけ 大輔	批評家、映画史研究者、跡見学園女子大学准教授	【放送部門】		
【音楽部門】			いとう 伊藤	じゆん 純	プロデューサー
おおた 大田	みさこ 美佐子	神戸大学大学院教授	いのうえ 井上	ゆみこ 由美子	脚本家
こくど 国土	じゆんいち 潤一	テノール・合唱指揮者・音楽評論家	うずい 碓井	ひろよし 広義	メディア文化評論家
しらishi 白石	みゆき 美雪	音楽評論家、武蔵野美術大学教授	おかむら 岡室	みなこ 美奈子	早稲田大学教授
ちば 千葉	ゆうこ 優子	一般財団法人宮城道雄記念館資料室長	はたもと 旗本	こうじ 浩二	読売新聞文化部記者
つかはら 塚原	やすこ 康子	東京藝術大学名誉教授	みづた 水田	のぶお 伸生	演出家
のがわ 野川	みほこ 美穂子	日本音楽研究家	よしかわ 吉川	くにお 邦夫	演出家
ふなき 船木	あつや 篤也	音楽評論家	【大衆芸能部門】		
【舞踊部門】			ささき 佐々木	とうこ 透子	intoxicate編集長
あべ 阿部	さとみ	舞踊評論家	さとう 佐藤	えいすけ 英輔	音楽評論家
おかみ 岡見	さえ	舞踊評論家、公立女子大学教授	ぬのめ 布目	えい一 英一	横浜にぎわい座館長・チーフプロデューサー
かめおか 亀岡	のりこ 典子	産経新聞大阪本社特別客員記者	ひだか 日高	みえ 美恵	演芸ライター
すけなり 祐成	ひでき 秀樹	読売新聞編集委員	やすだ 安田	けんいち 謙一	音楽評論家
ながの 長野	ゆき 由紀	舞踊評論家	ゆい 油井	まさかず 雅和	毎日新聞記者
まるも 丸茂	みえこ 美恵子	日本大学大学院非常勤講師、舞踊評論家	わたなべ 渡邊	ねいきう 寧久	演芸評論家、エンタメライター
【文学部門】			【芸術振興部門】		
あいはら 粟飯原	あやこ 文子	法政大学教授	かけお 掛尾	よしお 良夫	映画ジャーナリスト、映画祭ディレクター
あべ 阿部	まさひこ 公彦	東京大学 教授	かじや 楳屋	かずゆき 一之	神奈川県立青少年センター支配人
おざわ 小澤	みくる 實	俳人、「澤」主宰	きむら 木村	えりこ 絵理子	弘前れんが倉庫美術館館長
こしかわ 越川	よしあき 芳明	明治大学名誉教授	ひきの 久野	あつこ 敦子	公益財団法人セゾン文化財団常務理事
たわら 俵	まち 方智	歌人	ほりうち 堀内	ひろまさ 宏公	前アーツカウンシル東京 シニア・プログラムオフィサー
はちかい 蜂飼	みみ 耳	詩人、立教大学教授	やまもと 山本	まゆみ 麻友美	京都芸術センター副館長
まついえ 松家	まさし 仁之	小説家	【評論部門】		
【美術A部門】			かたやま 片山	もりひで 杜秀	慶應義塾大学教授
かとう 加藤	ひろこ 弘子	平塚市美術館特別館長	かみじま 上島	はるひこ 春彦	著述業
かや 萱	のり子	奈良国立大学機構奈良教育大学教授	くれさわ 暮沢	たけみ 剛巳	東京工科大学教授
くろかわ 黒川	ひろこ 廣子	東京藝術大学大学美術館長	こうのす 鴻巣	ゆきこ 友季子	翻訳家、文芸評論家
たなだ 棚田	こうじ 康司	彫刻家	ちようき 長木	せいじ 誠司	東京大学名誉教授
ながや 長屋	みつえ 光枝	愛知県美術館 副館長兼企画業務課長	はせべ 長谷部	ひろし 浩	演劇評論家、東京藝術大学名誉教授
みや 宮	いつき	美術家、多摩美術大学名誉教授	みうら 三浦	あつし 篤	大原美術館館長
よこやま 横山	かつひこ 勝彦	呉市立美術館 館長			

【部門内五十音順】

令和7年度(第76回)芸術選奨委員一覧【推薦委員】

【演劇部門】		【美術部門】	
いづみか ともこ 飯塚 友子	産経新聞文化部記者	いしだ たかし 石田 尚志	美術家
いづみか めぐみ 井上 愛	独立行政法人日本芸術文化振興会プログラムオフィサー	いわさき たかひろ 岩崎 貴宏	美術作家
うちだ よういち 内田 洋一	文化ジャーナリスト	おだに もとひこ 小谷 元彦	彫刻家、美術家
おさない しん 小山内 伸	演劇評論家、専修大学教授	こばやし けいこ 小林 桂子	日本工業大学 准教授
かみざわ かずあき 神澤 和明	演出家、演劇評論家	さとう とき啓 佐藤 時啓	東京藝術大学名誉教授・土門拳記念館館長
こだま りゅういち 児玉 竜一	早稲田大学教授	さわむら しみこ 沢村 澄子	書家
たくさがわ みずき 田草川 みずき	千葉大学教授	すみ かな子 角 奈緒子	金沢21世紀美術館学芸課長(チーフ・キュレーター)
たくば しょうこ 田窪 桜子	演劇ジャーナリスト	せき けい子 関 康子	編集者、NPO法人建築思考プラットフォーム理事
ひかわ まりこ 氷川 まりこ	伝統文化ジャーナリスト	たけうち まりこ 竹内 万里子	写真批評家 京都芸術大学大学院教授
ひろせ よりこ 広瀬 依子	追手門学院大学講師	なるみ ひろし 成実 弘至	京都女子大学教授
ふじた ちかみ 藤田 千史	川崎市アートセンターアルテリオ小劇場ディレクター	はしもと あずさ 橋本 梓	京都国立近代美術館主任研究員
もりやま なおと 森山 直人	演劇批評家、多摩美術大学教授	はな いづほ 花井 久穂	東京国立近代美術館主任研究員
【映画部門】		まちむら はるか 町村 悠香	町田市立国際版画美術館 学芸員
あけち けいこ 明智 恵子	『キネマ旬報』編集長	まつなが しんたろう 松永 真太郎	横浜美術館 学芸員
いとう さとり 伊藤 さとり	映画評論家	やまな けい子 山名 善之	東京理科大学教授
おかだ ひでゆり 岡田 秀則	国立映画アーカイブ主任研究員	【メディア芸術部門】	
かみくら いづみ 上倉 泉	日本大学教授	いしだ みり 石田 美紀	新潟大学教授
きむら なおこ 木村 直子	新聞記者	いとう ゆう 伊藤 遊	京都精華大学 国際マンガ研究センター 特任教授
すぎはら せいじ 杉原 永純	福岡市総合図書館フィルムアーカイブ学芸員	おの ともこ 小野 朋子	新千歳空港国際アニメーション映画祭チーフディレクター
てるおか そうぞう 暉峻 創三	映画評論家	おぼな たかし 尾鼻 崇	立命館大学 准教授
なかやま はるみ 中山 治美	映画ジャーナリスト	さいとう なおひろ 斎藤 直宏	東京国際工科専門職大学教授
みやじま りゅうじ 宮島 竜治	映画編集者	さの あきこ 佐野 明子	同志社大学准教授
やたべ よしひこ 矢田部 吉彦	前東京国際映画祭ディレクター	たかせ こうじ 高瀬 康司	宝塚大学東京メディア芸術学部准教授
【音楽部門】		つちや りょうこ 土屋 綾子	編集者
おぼた つねお 小畑 恒夫	昭和音楽大学客員教授	のなか もも 野中 もも	ライター、翻訳者
こみぶら ひろゆき 小味 潤之	音楽評論家、同志社女子大学准教授	よこい しゅうこ 横井 周子	マンガライター、東北芸術工科大学准教授
しばつじ じゅんこ 柴辻 純子	音楽評論家	【放送部門】	
しむら けい 志村 哲	大阪芸術大学教授	いりえ たのし 入江 たのし	メディア・プロデューサー
たけのうち けいこ 武内 恵美子	京都市立芸術大学 准教授、理事	うめおか ひろし 梅岡 宏	公益財団法人放送文化基金専務理事
たにがはら かずこ 谷垣内 和子	邦楽評論家	おおいし みちこ 大石 みちこ	東京芸術大学大学院映像研究科教授
てらにし もとゆき 寺西 基之	音楽評論家	おかだ けい子 岡田 恵和	脚本家
なかむら たかし 中村 孝義	大阪音楽大学名誉教授、音楽評論家	さくらい きよこ 桜井 聖子	プロデューサー
にしだ ひろこ 西田 紘子	九州大学大学院芸術工学研究院教授	さの あゆみ 佐野 亜裕美	ドラマプロデューサー
はせがわ まこと 長谷川 慎	静岡大学教授	たけだ かず 武田 和	公益財団法人川喜多記念映画文化財団代表理事
まえはら めぐみ 前原 恵美	東京文化財研究所 無形文化遺産部 無形文化財研究室長	なかもと けい子 中町 綾子	日本大学芸術学部教授
やまだ はるお 山田 治生	音楽評論家	かじた まさみ 藤田 真文	法政大学社会学部メディア社会学科 教授
【舞踊部門】		やまざき ゆうじ 山崎 裕侍	北海道放送報道部デスク
いわた なおみ 稲田 奈緒美	舞踊評論家、桜美林大学教授	【大衆芸能部門】	
うみの びん 海野 敏	東洋大学教授	いちかわ まこと 市川 誠	編集者
おかだ まりこ 岡田 万里子	桜美林大学教授	かとり よしひこ 香取 良彦	東京芸術大学非常勤講師
かとう しげはる 加藤 繁治	企画室「日本の藝」主宰、作詞家	かわさき ひろし 川崎 浩	毎日新聞社客員編集委員
さくらい たかこ 桜井 多佳子	舞踊評論家	さとう ともみ 佐藤 友美	「東京かわら版」編集長
たかはし もりひこ 高橋 森彦	舞踊評論家	ながい としひろ 長井 好弘	演芸評論家
あき せい 貫 成人	専修大学文学部教授	なかがわ けい子 中川 桂	二松学舎大学教授
はまぐち くにこ 濱口 久仁子	早稲田大学演劇博物館招聘研究員	なかにし けい子 中西 らつ子	イラストレーター
みやづ せいふ 宮辻 政夫	演劇評論家	はらやま けんた 萩原 健太	音楽評論家
むらやま くみこ 村山 久美子	舞踊評論家、早稲田大学非常勤講師	はらだ かずのり 原田 和典	音楽評論家
もりやま みか 守山 実花	舞踊評論家	まえだ けんじ 前田 憲司	芸能史研究家
わたなべ まゆみ 渡辺 真弓	舞踊評論家、オン・ステージ新聞編集長	まつお みゆ子 松尾 美矢子	演芸ライター
【文学部門】		むらお せいの 村尾 泰郎	音楽／映画評論家
いし いち 石井 千湖	書評家	【芸術振興部門】	
うめがはら みかこ 梅内 美華子	歌人	どい けい子 土肥 悦子	一般社団法人こども映画教室代表理事(尚)シネモンド代表
おおくはら りんこ 大口 玲子	歌人	ひろかわ あきこ 廣川 麻子	シアター・アクセンビリティ・ネットワーク理事長、東京大学先端科学技術研究センター特任研究員
からしま デイヴィッド 辛島 デイヴィッド	早稲田大学教授	ほり ともへい 堀 朋平	住友生命いづみホール音楽アドバイザー
たなか あみ 田中 亜美	俳人	やまぐち ようぞう 山口 洋三	インディペンデント・キュレーター
こうち けい 都甲 幸治	早稲田大学文学部教授	わたなべ ひろし 渡辺 弘	岡山芸術創造劇場劇場長兼プロデューサー
あまの みつよし 沼野 充義	東京大学名誉教授	【部門内五十音順】	
のざき かん 野崎 歓	放送大学教授		
ほむら ひろし 穂村 弘	歌人		

芸術選奨運営事務局

(デロイトトーマツ テレワークセンター株式会社) 宛

(E-mail : sensho_jimukyoku@tohatsu.co.jp、TEL : 070-1301-6012)

令和7年度(第76回)芸術選奨贈呈式・祝賀会 取材申込書

令和8年3月11日(水) 12:00必着

項目	記入事項
1 代表者氏名	
2 代表者ふりがな	
3 所属先名	
4 部署・番組名	
5 参加人数	(名)
6 種別	<input type="checkbox"/> ペン <input type="checkbox"/> スチール <input type="checkbox"/> ムービー
7 受賞者への個別取材	<input type="checkbox"/> 個別取材希望あり <input type="checkbox"/> 個別取材希望なし
8 個別取材希望対象者名 (※「個別取材希望あり」 の方のみ)	
9 ご連絡先 (Tel)	
10 ご連絡先 (Mail)	
11 備考	

※本申込書に記載された個人情報は、本式典の参加者の把握及び緊急連絡先のみを目的として使用し、厳重に取扱うものとします。

※複数人申し込まれる場合は、代表者が人数分お申し込みください。

※受賞者の都合等により、個別取材をお受けできない場合もございますので、ご了承ください。